

アメリカ・インディアンとその文学

刈田元司

1

「インディアン・ルネサンス」という言葉が使われだしたのは、それほど遠い以前ではない。最近ではアメリカの歴史にしても文学にしても先住民民族であったインディアンを無視することができなくなっている。だから、メキシコの歴史学者オゴーマン (Edmundo O'Gorman) が彼の著書 *The Invention of America* (Indiana Univ. Press, 1961) において、新世界がコロンブスによって発見されたという従来の意見を否定しているのも、インディアンが彼よりも数千前以前に発見しているのではないかという理由のほかに、アメリカ半球存在の確認がヨーロッパの宇宙構造論者に深刻なショックを与えた点を重視しなければならないと考えたからである。すなわち、それまでヨーロッパ、アジア、アフリカの三大陸がいわば神によって定められた三位一体として、あらゆる思想体系の基礎をなしていたのが、この第4の大陸の出現によって根底をくつがえされてしまったからである (cf. Marcus Cunliffe, "The Condition of an American Literature". *American Literature to 1900* (1973), pp.15—18)。それだけに先住民民族としてのインディアンは「新しい民族」の力づよい美しい象徴として考えられるようになった。また事実、たとえばコロンブスの1492年10月12日の報告にも (岩波文庫の訳書参照)、彼らが穏やかで平和的であるばかりでなく、誇り高く、勇敢な民族で、彼ら以上の民族は世界にいないとまで口をきわめて賞賛しているのである。コロンブスは友好的なタイノ (Taino) 族の10人を誘拐してスペインに連れて帰り、白人の習慣を教えた。

スペインの探険家たちは北米大陸のいりくんだ海岸線をたしかめ、更に

内陸に入ったが、インディアンの社会があまりに多様なのに当惑した。西インド諸島および南東部では多くのインディアンの部族は強力な首長のもとに生活していた。1521年コルテス (Cortés) がメキシコを征服したとき、彼はまばゆいばかりの文化とヨーロッパに見られたと同様のすぐれた政治組織に接して驚嘆した。1540—42年のコロラドの南西部と高原地帯およびキャンザスへの遠征によって、更に別種の社会形態を見た。メキシコの北部には貧しい狩猟集団 (band) 密集した部族 (tribe) として大きな村に生活するプエブロ・インディアン、野牛を追う半遊牧のインディアンもいた。隣り合っているも習慣、法律、信仰、道具、手芸品の類以しているようでいて非常に異なる多種類のインディアンを見たのである。

あるグループは精巧な手芸品を制作していた。灌漑による水田を利用しているもの、恒久的な村に生活して高度の儀式を有するものがあるかと思えば、家族単位で放浪するバンド (血縁集団) もあった。民主的なグループもあれば、富によるきびしい階級組織を持つグループもあり、指導者なしのグループ、首長を選んでそれに従うグループもあった。

スペイン人につづいて北米探険に加わったフランス人、イギリス人も、各種のインディアンの類似と相異に当惑するばかりであった。拷問を実施しているイロコイ (Iroquois) 族、丸太小屋に住み、敵の首を勝利の記念として取るチョクトー (Choctaw) 族、捕虜を奴隷とするクワティウトル (Kwatiutl) 族、土の家に住むマンダン (Mandan) 族、野牛の皮のテントを張るスー (Sioux) 族、言語、習慣、宗教、伝統の似ている現在のウィスコンシンに住んだサック (Sac) 族とフォックス (Fox) 族等々、生活様式と言語において全く異なる部族がいたのである。

2

紀元前4万年頃、緑地を求めて当時陸つづきであったベーリング海峽をわたってアメリカ大陸へ来た蒙古系のアジア人は、南下分散して数千のグループに分かれた。ロッキー山脈の岩石にへばりついて岩苔を常食とするような、マーク・トウェインが地上最低の人間と歎いた部族から、南米にわたってアステカ、マヤ、インカの高度の文明を築きあげた部族に至るま

で、すなわち単純なカテゴリーから複雑なカテゴリーに、野蛮 (savagery) から文明 (civilization) の状態までに分けられる。ダーウィン (Charles Darwin) やウォレス (Alfred Russel Wallace) 以前にも、アメリカ・インディアンの観察者たちは進化が文化に起こっていることを認めた。そしてこの文化の進化を定めるためのいくつかの試みがなされた。たとえばマルクスが1857年に提起した進化の理論は、1. 原始共産主義, 2. 異教社会, 3. 古代古典社会, 4. 封建主義, 5. 資本主義, 6. 共産主義の図式であったが、これは原始共産主義が存在しなかったという事実以外にも、これらの段階が西欧文明の自己中心的な理念に束縛されていたといえる。有名なのはモーガン (Lewis Henry Morgan) が『古代社会』(*Ancient Society*, 1877) において示したもの、インディアンの生活を通じて人類の発展段階を、1. 下級野蛮 (lower savagery), 2. 中級野蛮 (middle savagery), 3. 上級野蛮 (upper savagery), 4. 下級未開 (lower barbarism), 5. 中級未開 (middle barbarism), 6. 上級未開 (upper barbarism), 7. 文明 (civilization) に分けた図式で、血縁集団が地縁集団に先行し、原始乱婚制から一夫一婦制へ進化するとし、集団が製陶の技術を覚えるころから4の段階へ進化するとした。

しかし最近の人類学は以前の理論——社会が母系家族から父系家族へ、狩猟から農耕へ、野蛮から未開を経て文明へ進むという考え方に加担しない。また文化の展開が最終のゴールに向かって着実な「進歩」をたどるといふ意見にも賛成しない。またベネディクト (Ruth Benedict) が『文化の諸様式』(*Patterns of Culture*, 1934) の中で言っている、南西部のプエブロ・インディアン (Pueblo) は穏やかな部族であるのに対して北西部沿岸の住民は戦闘的であるという心理的指摘も、実地調査の裏づけのない理論であるとして退けられた。

現在おこなわれている最も説得力のある分類法 (taxonomy) は生物分類方式で、1. 血族集団 (the Band — a, family, b, composite band, c, patrilocal band), 2. 部族 (the Tribe — a, lineal tribe, b, composite tribe), 3. 首長制 (the Chieftdom), 4. 国 (the State) となる。これによると、北米インディアンをもはやロマンティックな目で見

こともなく、「自然の高貴な野蛮人」(‘nature’s noble savage’) あるいは「無垢の大地の子」(‘unspoiled child of the land’) と見ることもなく、冷静な客観的な目で眺めることができる。その出発点となったのはピーター・ファーブの『人類の進歩』(Peter Farb, *Man’s Rise to Civilization: As Shown by the Indians of North America from Primal Times to the Coming of the Industrial State*, E. P. Dutton & Co., 1968) で、私自身もはじめて読んだときは大きな興奮を禁じ得なかった書物である。

3

洗練された高度の文明を持ったヨーロッパ人が新世界の未開の民族を征服しはじめたとき、両者のあいだに全くの共通点がなかったことは確かであろう。現在25万ほどの人口しかないインディアンも、当時は2,000部族以上のインディアンが1,200万もいた。征服者を通じて一般人が描くインディアンのイメージは、頭に野鳥の羽根、手にまさかり、獣皮の衣服、固く結んだ口、ワシ鼻と厚い上唇であり、先住民族でありながら、最終的には白人に大陸全体を奪われてしまったところを見ると、知能が低いのではないかと疑われた。しかし17世紀後半から18世紀前半にかけてのヨーロッパの知識人は白人による大陸の略奪と先住民族の死滅に対して相反する見解を抱いた。すなわち神の定めた文明の進歩を妨げる愚鈍な民族と見る反面、彼らを自然の純粹さを具現する「高貴な野蛮人」と見たのである。ルソー、シャトーブリアン以下フランスの文学者をはじめとして、イギリスのゴルドスミス、ワーズワス、コールリッジ、シェリーたちもインディアンを人類の黄金時代からの遺物のように考えた。

しかし、インディアンの実態に多少とも触れる機会があったアメリカの作家は、観念的なイメージを抱くヨーロッパの作家たちとは異なった考えを持った。クーパーの *Leatherstocking Tales*, ロングフェローの *Hiawatha*, メルヴィルの *The Confidence Man*, マーク・トウエインの *Huck Finn and Tom Sawyer Among the Indians* などに現われるインディアンはほとんど白人に敵対する悪者として描かれている。彼らの

集落の中に実際に生活したことのある歴史家のフランシス・パークマンになると扱い方が違う。固定した特徴を持つ類型的なインディアンは、小説家にとっては利用価値があるであろうが、歴史の実際の舞台では役に立たない。ギボンの『ローマ帝国衰亡史』にも匹敵するパークマンの北米大陸占有をめぐる英仏の激烈な闘争の歴史の中に、重要な脇役としてあらわれるインディアンの部族は、アルゴンキン、フロリダ、ヒューロン、イリノイ、カンザス、オタワ、ポーニー、シャワノー、スー、テキサス等を含めて108を数え、ポンティアクその他の大酋長にひきいられた戦士が、英仏両軍と三つ巴になって大森林、大草原を駆けまわる様はあたかも絵巻物のようで、彼らを単一の特性を持つ種族として規定することは困難になってくる。

ところで、被征服者のインディアンはどのように白人を迎えたのであろうか。

1970年11月の感謝祭の当日、350年前メイフラワー号に乗った Pilgrim Fathers がはじめて大陸に上陸した Plymouth Rock に、25の部族から200人のインディアンが集まって“Day of Mourning”（哀悼の日）を催した。むかし巡礼始祖たちの村づくりを有形無形に助けた人口1千人ほどのワムパノグ(Wampanoag)族は、通訳をしたスクォント(Squonto)、ホボマー(Hobomah)たちをはじめとして、清教徒たちが野蛮人一掃のために主を賛美していることは知らなかった。だからやがて自分たちの仇敵となる侵入者を無邪気にもてなした先祖の友情行為は彼らの“the greatest mistake”であったとワムパノグ族直系の子孫たちは糾弾して氣勢をあげ、これから毎年この日を記念の日にすることを決定した。驚いた政府は翌年からの集会を禁止した。イロクォイ、ショーニー(Shawnee)、ラコタ(Lakota)、アニシナベ(Anishinabe)の各部族の歌と物語の中に同様の後悔のひびきがある。チェロキー族(Cherokee)の「美しい色の蛇」という物語を紹介してみよう。

むかしある有名な獵師が獲物の鳥を何羽か持って家に帰る途中、道ばたに小さな蛇を見た。全身美しい色で敵意もなさそうだった。しばらく眺めていたが、空腹らしいと見て鳥を一羽与えた。2、3週間後、同じ場所で

また蛇を見た。相変らず美しい色で、敵意も示さず、少し太ってきているようだった。ウサギを一羽投げ与え、帰りしなに「ハロー」と言った。しばらくしてまた蛇に会った。すっかり大きくなっていたが、敵意はなく、空腹らしかった。七面鳥を与えると、がつつ食べた。またしばらくして雄の子鹿を二頭背中にかついで帰る途中、非常に大きくなっている蛇にまた会った。相変らずひもじそうだったので、子鹿を一頭与えた。その夜、村人たちが集まって焚火のまわりで古い歌をうたいながらストンプダンス（早くて強いリズムの踊り）をしていると、例の蛇がやってきて、大きな長い体で取り巻いた。全身美しい色で好意的であったが、空腹らしかったので、村人たちは怖くなりはじめた。元気な若者たちが弓と矢を持ってきて一斉に射た。蛇は傷ついたが、尻尾を振って、まわりの多くの人を殺してしまった。蛇はまるで白人のようだと人びとは言い合ったという。(Shirley Hill Witt and Stan Steiver, ed., *The Way: An Anthology of American Literature*, Vintage Books, 1972. 所収)

4

1607年、ジョン・スミス大尉 (Captain John Smith) とジェイムズタウン植民者を歓迎したのは、アルゴンキアン語 (Algonquian) を話すポウハッタン (Powhattans) 族であった。現在のリッチモンドにあるジェイムズ川の滝の座席から近隣地域を支配していたポウハッタンは小さな王国を持っていた。200ほどの村々から毛布、とうもろこし、真珠などの献上物が多く裕福であった。はじめ国王は植民者を歓迎したばかりでなく、困っている植民地に食糧の供給もしたが、やがて相互の間に緊張と誤解も生じるようになり、王妃や王自身の弟オペチャンカノウ (Opechanca-nogh) は白人の侵入に強く反対した。ジョン・スミスが王の領地に迷いこんで捕えられ、まさに処刑されようとしたときに、ポウハッタンの娘が助命してくれたために助かったという話は、ジョン・スミス自身の記述により、アメリカの歴史上、文学史上の半ば伝説的な挿話として有名である。娘の名はマタオカ (Mataoka) といったが、「はしゃぎ屋」(frolicsome) という意味のポカホンタス (Pocahontas 1595/96?—1616/17) という

ペットネームの方が有名である。彼女はやがて平和の名のもとに利用され、キリスト教信者となり、19歳のころ10歳年上のジョン・ロルフ (John Rolfe) と結婚した。ロルフは西インド諸島のタバコの苗を実験的にヴァージニアに移植して成功させた人物で、ポカホンタスの「珍しい人柄」に魅かれたらしい。一人息子のトマス (Thomas) も生まれた。夫婦はイギリスに招待され、1617年1月国王ジェームズ一世、アン王妃に謁見、ベン・ジョンソンの仮面劇 *The Vision of Delight* も見た。3月にロルフはポカホンタスの反対を押ししてヴァージニアに帰らねばならなかったが、彼女はテムズ川を離れる前に、寒い冬のために肺炎を起こして死亡した。

ポカホンタスは半ば伝説的な女性として歌や小説に取りあげられ、20世紀になってもカール・サンドバーグ、ヴェイチェル、リンゼイ、ハート・クレインにうたわれ、「アメリカのシンボル」とまでたたえられたのである。彼女の父もやがて亡くなって、弟が実権を握ったが、多くの流血ののち、1650年ころにはポウハッタン族は勢力を失ってしまった。

ポカホンタスと並んでアメリカの歴史に登場する代表的なインディアン女性をもう一人紹介してみよう。ジェファソンがナポレオンから買収した広大なルイジアナ地域を1804年から1806年まで3年の日数をかけてミズーリ川から太平洋岸まで調査探険したルイス (Merriwether Lewis) とクラーク (William Clark) の活動は北米大陸の歴史上の最も壮大な、また無血で成功を収めた偉業として燦然たる光を放つものであり、スミス (Henry Nash Smith) 教授も言うように、西部を神話から現実に変えた重要な意味も持つものであった。その探険に通訳として働らいた毛皮商人フランス系カナダ人シャルボノー (Toussaint Charbonneau) のインディアン妻サカジャウィア (Sacajawea, c. 1786—1812) がその著名な女性で、ルイス＝クラークの報告に記録されているばかりでなく、多くの研究がおこなわれており、数年前には1,360ページのベストセラー小説の主人公にもなっている (Anna Lee Waldo, *Sacajawea*. Avon Books, 1978)。

彼女の生まれたのは現在のアイダホ州東部で、ショショニあるいはスネイク (Shoshoni or Snake) インディアンのレムヒ族 (Lemhi band) に

属していた。セントルイスから出発したルイス＝クラーク探険隊が現在のノース・ダコタ州のミズリー川沿岸にいたヒダトサ (Hidatsa) 族のマンダン村からいよいよ活動をはじめたとき、通訳として雇われたのがシャルボノーで、同行したサカジャウィアは生後2か月の息子ジャン・バプティスト・シャルボノー (Jean Baptiste Charbonneau) を抱いていた。インディアンの敵対行為を避けることに腐心していた探険隊にとって、このインディアン母子の姿は彼らに戦意のないことを示す屈強の印となった。彼女を通じてルイスとクラークも太平洋岸の多くの部族とも話すことができたし、料理、狩猟にも手腕を発揮、クラークの言葉によれば「いかなる事態のときも毅然たる態度をくずさなかった」という。

探険の終了後、旅行中サカジャウィアの息子ジャン・バプティストを可愛いがっていたクラークは、彼の将来の教育についても配慮し、バプティスト教会の牧師とカトリック司祭に託した。またサカジャウィア夫婦の身の振り方についても心配し、セントルイスに小さな店を用意してやったが、シャルボノーは妻の病氣と自分自身の「文明生活に倦きた」ことを理由に、妻の土地へ戻って行った。やさしい性格で白人の生活様式にも慣れたサカジャウィアの生き方がインディアンの生存の将来の模範にもなったということができよう。

インディアンの将来の運命といえ、ジャン・バプティストも代表的な模範例を示すことになる。彼を主人公にした伝記小説『シャルボノー——二つの夢の男』(Winfred Blevins, *Charbonneau: Man of Two Dreams*, Avon Books, 1976) を読むと、波瀾に富んだ彼の生涯がわれわれの興味をつよく引いて離さない。多少の教育を身につけていたバプティストはセントルイスの交易会社に働いていた。セントルイスは当時、ニューオーリンズその他東部の都市と、アメリカのドル貨ばかりかスペインのリアル貨、フランスのリーブル貨を用いて、毛皮を衣料、麻、タバコ、ウイスキー、ねじ釘、糖蜜などと交換する交易の中心であった。彼はそこで漠然とながら白人社会の力と影響力を知る機会を得た。母は彼に白人の大きな魔力 (“big medicine”) の秘密を見つけだすようにと望んだ。第一の秘密は知識、第二は事業、第三は社会的影響力と考えていたようであ

る。1822年の元日には、かつてニール神父 (Father Neil) のすすめにより道徳的進歩の記録としての日記を書く決心もした。会社の女主人からプルタークの『英雄伝』、『矢楽園』、『天路歷程』、『テンペスト』バイロンその他多くの古典を読むようにと貸してもらった。翌1823年9月のけだるい日の午後、ミズーリ川の東岸土手にすわり、口で拍子をとりながらインディアンの歌をうたっていたとき、一人の青年神士が近づき、ドイツなまりの英語で話しかけ、ウルテンベルグの王子パウルと自己紹介した。バプティストが自分は、英語、フランス語、ラテン語、いくつかのインディアン語、が話せるし、数学、歴史、神学も勉強したと言くと、相手は驚いた。この偶然の出会いによって、パウル王子はバプティストをヨーロッパに連れて帰り、ナポレオンをめぐるヨーロッパの変動きわまりない世界の中で、ドイツ、イギリスに6年間とどまってさまざまな教育を受けた。バプティストにはこの高い教養のヨーロッパ体験のほか、ロッキー山脈中の罫猟、メキシコ戦争への参加、18年にも及ぶカリフォルニアの金鉱採掘の仕事と、目まぐるしいばかりの多様な経験を重ねている。彼が、二つの祖国ではないが、二つの夢の統一をたえず心に描いていたことは十分想像することができる。

1900年に最初出版され、のち1963年に改訂版の出たオマハ族の小学校教育の回想を描く『真中の五年生』(*The Middle Five: Indian Schoolboys of the Omaha Tribe*, The University of Wisconsin Press) の著者フランシス・ラ・フレッシュ (Francis La Flesche) が、第二の好例となる人物であろう。彼の父ジョゼフ・ラ・フレッシュはフランス人商人とオマハ族の女との息子で、インディアンのあいだで育てられ、父親の交易の仕事を手伝った。白い文化と赤い文化の選択を迫られて後者をえらび、のち有名な酋長 "Big Elk" の後継者となった。彼は民族の将来は、白人文化に順応する以外に生きる道がないと見て、その運動の指導者となった。彼の主義によって子供たちはミッションスクールや白人教師によって教育された。娘の Susette は作家、講演者、インディアンの権利擁護者 "Bright Eyes" として著名な Mrs. T. H. Tibbles となり、もう一人の娘はフィラデルフィア女子医大を卒業、インディアンの女性として始め

て医学博士の学位をとり、オマハの同族に医者として働いた。兄のフランシスはワシントンにあるインディアン局の長官室に勤務するかたわら、ナショナル大学を卒業、1929年退職するまで政府機関に働き、1926年にはネブラスカ大学から名誉博士号も贈られている。

シャルボノーとラ・フレッシュは白人文化との同化に踏みきってある程度成功した19世紀の少数例であるが、今日では詩人の Edna Lou Walton (1894—1961), 人類学者 Ella Clara Deloria (1888—1971), 小説家 N. Scott Momady ほか著名なインディアン出身者も出てきてはいるが、少数民族としては未だ一步の感がある。すでに1835年12月29日チェロキー族がアメリカ議会に提出した請願 (Cherokee Memorial) の中にうたわれている “In truth, our cause is your own. It is the cause of liberty and of justice. It is based upon your own principles, which we have learned from yourselves; for we have gloried to count your Washington and your Jefferson our great teachers……We have practised their precepts with success. And the result is manifest. The wilderness of forest has given place to comfortable dwellings and cultivated fields……Mental culture, industrial habits, and domestic enjoyments, have succeeded the rudeness of the savage state. We have learned your religion also. We have read your sacred books. Hundreds of our people have embraced their doctrines, practised the virtues they teach, cherished the hopes they awaken, ……we speak to the representatives of a Christian country; the friends of justice; the patrons of the oppressed. And our hopes revive, and our prospects brighten, as we indulge the thought. On your sentence our fate is suspended……On your kindness, on your humanity, on your compassions, on your benevolence, we rest our hopes……” 「まことに、われわれの大義はあなた方の大義です。自由と正義の大義です。……われわれはあなた方のワシントンやジェファソンをわれわれの偉大な師と仰ぎました。……その結果は明白で、森林の荒野は快適な住所、耕作さ

れた畑となり、……精神的な教養、勤勉な習慣、家庭の楽しみが野蛮時代の粗野を忘れさせました。……あなた方の宗教も学びました。……キリスト教国の代表者たる正義の友、被抑圧者の保護者たちに申しあげます……あなた方の宣告にわれわれの運命がかかっています……あなた方の親切心、あなた方の人間愛、あなた方の同情心、あなた方の慈悲心にわれわれの希望をつなぎます、……」というインディアンの必死の願いが果してかなえられたかどうか？第16代リンカーン大統領の助言、第19代ヘイズ大統領の1872年度教書に盛られた多少の反省にもかかわらず、マサチューセッツのワンプノアグ（Wampanoags）族のフィリップ王が四つ裂きにされてその首がプリマスのさらし台に20年間さらされ、妻子が西インド諸島に奴隷として売られた17世紀以来、いかに多くの迫害と土地掠奪が加えられたか、その歴史の暗い一面は読者に耐えられないほどである。

Murray L. Wax 教授が *American Indians: Unity and Diversity* (Prentice Hall, 1971) で述べているように、インディアンは知能、道徳ともに劣等で、新大陸の開発にとって邪魔であるから、これを排除した方がよいという古い考え方、インディアンも神によって造られた不滅の靈魂の持ち主であるから、キリスト教に改宗させるべきであるという考え方から、インディアン文化を白人文化に同化させるべきである、あるいはその独自性を存続させるべきであるという多元論に至るまで、さまざまな論がなされてきた。しかし、それらをも含めて、今日一般におこなわれているステレオタイプは、

1. インディアンは、自分の必要とするものしか殺さず、移動する自然世界を大切にす環境保護者である。
2. 彼らは原始共産主義者で、物資や奉仕ばかりか愛情なども共有していた。
3. すぐれた闘士であったが、攻撃されたときのみ戦い、敵をせん滅するようなことはなかった。
4. 生来の民主主義者で、個人、部族間の意見の相違に対しても寛大であった。
5. 競争心がなく、自分の利益よりもグループ全体の利益を優先させた。

6. 前科学的ではあるが、世界や宇宙のいとなみに対して深い知恵を持っていた。(Fraderick W. Turner III, ed., *The Portable North American Indian Reader*, 1973, p.10 による)。このような固定観念がすべて妥当でないことは、これまでに見てきた諸例によっても明らかであろう。

5

アメリカ・インディアンはその部族の数とほとんど同数の言語を持っていた。しかし文字を持たないために、旧世界の著述に類する方式は新世界には発達しなかった。新大陸に侵入したヨーロッパ人は自分たちの知っている伝統的な文学形態も、書物も図書館も見ることができなかった。インディアンが物言わぬ民族と誤解されたのも当然であった。しかし彼らを愚鈍な無言の種族と規定するのは愚の骨頂で、たとえばインディアン征討の陸軍大佐ドッジ (Richard Irving Dodge) でさえも *The Plains of the Great West* (1876) の中で、「インディアンは日常生活では陽気で、おしゃべりで、いろんな話を話したり聞いたりすることが好きだ。ことに大きないたずらには目がないようだ」と述べている意見からも、彼らがくつろいだ仲間同志のあいだでは相当口数が多くしゃべり合うことが想像できる。

文字による効果的な意思の伝達方式が欠如している場合、それに代る何らかの完全な伝達技術が必要となるのはどの民族にとっても当然で、親から子へと代々伝えられるうちに一種の伝達形式が確立するものである。口頭伝達を重要な手段としているために、伝承、物語、行政的な訓令などすべて反復に高い価値がおかれるようになり、この反復の手法が日常生活における歌や演説の領域にもひろげられたと見ることができる。

したがって、口頭伝達の伝統の中で、話される言葉に大きな尊敬を抱くのは当然で、その言葉がそれ自身の生命、永遠の生命をそなえているとされるのである。口から出された言葉は地面に落ちて、こなごなにくだけるのではなくて、生まれでた言葉は空に飛んで永遠に生き、必要の場合には呼びもどせるということになる。このように不滅の価値を持つ言葉が、無

雑作に、いいかげんに口にされていいわけはなく、その神聖な不死性はいくまでも尊敬しなければならないのである。言葉の神聖さを高めその意味を十分に包含する重要な要素が沈黙でなければならないことは必然的な結果で、沈黙こそ思想と言葉を統合するつなぎなのである。

口頭伝統の最も重要な機能は、部族の教師、祭司、演説などの公務執行者に見られる。彼らの強烈な記憶力がいわば「図書館」の役割を果たし、部族たちから高い尊敬を払われる演説力が指導者の資格と見なされる。有名なイロクォイ族の六大連合で、すべての決定が万場一致によってなされる習慣だったので、部族全体を代表して自分たちの正義を主張する雄弁力を所有することが指導者に要求されるのは当然であった。逆にいえば、そういう雄弁力の所有者が指導者に選ばれたのである。

トマス・ジェファソンが『ヴァージニア・ノート』(*Notes on the State of Virginia*, 1785) にあげている例を紹介してみよう。イロクォイ族六大連合のひとつであるペンシルヴァニア・オハイオ・ミンゴ族は、白人と友好関係にあったが、1774年白人がミンゴ族の集団を虐殺し、ジョン・ローガン酋長の家族の何人かをも殺害した。ミンゴ族が復讐戦争を仕かけた後の和平会談でローガン酋長は次の演説をおこなった。

I appeal to any white man to say, if ever he entered Logan's cabin hungry, and he gave him not meat; if ever he came cold and naked, and he clothed him not. During the course of the last long and bloody war, Logan remained idle in his cabin, an advocate for peace. Such was my love for the whites that my countrymen pointed as they passed, and said, "Logan is the friend of the white man." I had even thought to have lived with you, but for the injuries of one man, Colonel Cressap, who last spring, in cold blood and unprovoked, murdered all the relations of Logan, not even sparing my women and children. There runs not a drop of blood in the veins of any living creature. This called on me for revenge. I have sought it; I have killed many; I have fully glutted my vengeance. For my countrymen I rejoice

at the beams of peace. But do not harbor a thought that mine is the joy of fear. Logan never felt fear! He will not turn on his heel to save his life. Who is there to mourn for Logan? Not one. (わたしは白人の誰かに言ってもらいたい。ローガンの小屋に空腹で入ったが、肉を与えられなかったと、また着る物もなく寒さにふるえながら来て、着物も与えられなかったと。この前の長い血なまぐさい戦争の間も、わたしは、平和をねがって、小屋のなかで手をこまぬいて何もしなかった。これがわたしの白人に対する愛で、同胞たちは通りすがりに「ローガンは白人の友だ」と言った。わたしは自分はあなた方と共に生きてきたと思ひさえした。しかしひとりの人物クレサップ大佐は、冷酷にも何のいわれもなく、ローガンの縁者すべてを、女子供も容赦することなく、殺害した。生きた者の血管にはわたしの血は一滴も流れていない。この行為がわたしに復讐を誓わせた。わたしは復讐を求め、多くを殺し、復讐に堪能した。同胞のために、わたしは平和の曙光をよろこぶ。しかし、わたしのよろこびが恐怖のそれであると考えてはいただきたくない。ローガンは恐怖を感じたことはない。自分の生命を助けるために、うしろを向くことは断じてない。誰がローガンのために泣いてくれるか？ひとりもないのだ。) この演説に対してジェファソンは「デモステネス、キケロ、その他著名な雄弁家の全演説を以てしても……ローガンの演説にまさる一句をも生み出すことはできない」と絶賛しているのである。

ローガン酋長ばかりではない。チェロキー族の「斑らの蛇」(Speckled Snake) 酋長、サック・フォックス族の「黒鷹」(Black Hawk) 酋長、シアトル酋長、アパッチ族のコチーズ(Cochise) 酋長たちの演説は、長短の差があるにせよ、いずれも迫力にみちみちたものであった。勿論、これらの演説は最初はそれぞれの部族の言葉で発表されたものを、陸軍の将校たちが写し、のち翻訳したものが多いため、インディアンの肩を持って多少修正した場合もないわけではないであろうから、全面的に信じこむことは危険かも知れないが、インディアンたちの抱いている言葉の神聖と永遠性を考えるときに、納得したい気持ちにもなる。

神聖な魔力を内包する言葉が有効に引用されるのは雄弁な演説だけでは

ない。『アメリカ・インディアン文学傑作選』(John Bierhorst, ed., *Four Masterworks of American Indian Literature*, New York: Jarrar, Straus and Giroux, 1974) に収められているのは、アステカ族 (the Aztec), イロクォイ族 (the Iroquois) マヤ族 (the Maya), ナバホ族 (the Navajo) 4部族それぞれの文化を特徴づける吟唱風, 演説調, 予言的, 呪文風の文体の作品である。このうちアステカとマヤはメキシコの部族なので, イロクォイとナバホの二篇を紹介することにする。

イロクォイの「哀悼の儀式」(The Ritual of Condolence) は, イロクォイ大連合を代表する50人の上院議員の一人であった大酋長の死を悼む儀式である。彼らにとって死は偉大な社会機構の破壊者で, 儀式はそれを修復する任務を持っている。さらに亡くなった酋長は後継者の人格の中に復活するという思想が根底にあるのである。式に参加して歌うのは, 2人の弟(連盟を構成する若手の2国の18人の酋長から成る)と, 3人の兄(先輩3国の32人の酋長から成る)で, まず3回大酋長の死を宣言してから, 3人の兄たる31人の酋長が, 多くの主婦, 戦士, その他を従えて, 村から一マイルばかりの森の中を道行きして, 正午すこし過ぎに, 一人の歌い手が立って故人賛美の歌をうたう。

Ye are in your graves who established it.

Ye have taken it with you, and have placed it under you,

And there is nothing left but a desert,……

(連盟を打ち建てたあなたは今は墓の中。

あなたは, 連盟を持ち去り, 地中に埋めた。

残っているのは荒地ばかり。)

(*Four Masterworks*, pp.121—178)

合唱がつづき, 子孫を呼ぶ高らかな声とともに森の端から多勢の会葬者が集まり, 代表が長い詠唱をうたう。つづいて3人の兄を代表する弁士が, 後継者を紹介しさまざまな注意を与え, 全員がその歌をくりかえす。注意は15条にも及び, さいごに墓の中の死者が会葬者全員に後継者公認を答えて式は終るのである。

この儀式でうたわれる詩に見られる特徴は、アメリカ・インディアン文学すべてに共通していることであるが、抽象用語を使わずに思想や関連事項を表現することができることである。この詩においても、社会は女性として描かれる。「彼女」は夫を失って目を泣きはらして悲しむ未亡人となり、この悲しみの妻も母系社会における女性の役割を持つものとしている。このような社会にとっての敵が死であることは当然であるが、死の礼賛もまた敵である。一族の者の死亡は社会を抑鬱状態におとしいれ、ときには「狂気」の状態にまでおとしかねない。そういう危機の到来を避けるためにも、大酋長の死去を盛大に哀悼し、その悲しみの情を逆に活力として社会をより強くさせることを希っているのである。

ナバホの儀式である「夜の詠唱」(The Night Chant 同書, pp.281—347)は日役にはじまって8日半の夜明けに終る長時間のものである。歌と祈りを伴奏にしておこなわれる総合儀式である「夜の詠唱」は、ナバホ集団の世界観を要約し、その理想に表現を与えている。低い次元では、人類学用語で「患者、受難者」(patient)と呼ばれる主要な参会者のために詠唱者のシャーマンのおこなう療法の一形式でもあるのである。式がはじまって最初の4日間、患者は歌にあわせて自分を浄めながら、神々にささげ物をする。4日目の真夜中に、眠っていた神々は目をさまし、歌のつづいている中で、天上の家を離れて、ナバホ族特有の砂絵の中に最終日まで姿をあらわす。そして患者が神々の力を吸収できるように自分たちの体を彼の体にさわる。クライマックスは9日目の夜明けに雷鳴の呼び出しではじまる。この時点で式は解散となる。

この式の方法は二つで、ひとつは儀式によって「悪」を追い払い、他は「神聖」を呼びこむのである。たとえば次の祈りの言葉、

My mind restore for me.

My voice restore for me. (心よ、わたしのためによみがえれ。

声よ、わたしのためによみがえれ。)

これには癒やしの意味がふくまれており、つづく次の祈りには悪魔払いの意味があらわれている。

Today take out your spell for me.

Today your spell for me is removed.

(今日わたしのためにあなたの魔力を引きとってくれ。

今日わたしのためにあなたの魔力は取りのぞかれる。)

上に見たような宗教的行事ばかりでなく、インディアンの生活のあらゆる相に、超自然的な面から日常的な事柄に至るまで、詩が力づよい役割を果していることは、彼らの尊敬してやまない言葉の力を考えれば、当然と思われる。いわゆる「インディアン・ルネサンス」の中心作家としてこれまで活動してきた Luther Standing Bear (Sioux 族出身), Vine Deloria, Jr. (Sioux 族出身), James Welch (Blackfeet 族出身), Hyemeyohsts Storm (Cheyenne 族出身), Ray Young Bear (Sac and Fox 族出身), Simon Ortiz (Pueblo 族出身) たちのほかに、特に注目されているのは N. Scott Momaday (Kiowa 族出身) である。彼は現在アリゾナ大学でインディアン問題と英文学を教えているが、1970年 *House Made of Dawn* によってピューリッツァ賞を受賞して認められた。彼は自分の部族につたわる伝説と、哲学的意味と、個人経験の真実を伝えることによって部族の文学を歴史的展望の中に位置づけようと *The Way to Rainy Mountain* (1969) を書いたが、その中で彼は「言葉はそれ自身の中にそれ自身の力を持っている。無から長じて音と意味となり、あらゆるものに起源を与える。……また言葉は神聖である。…」と言っているが、これはひとりキオワ族にかぎられる観念ではなく、インディアンの種族すべてに共通するものである。

スー族からアステカ族、チェロキー族から古代マヤ族にいたる40以上の部族の文化を代表する詩を集めた選集『風の道』(John Bierhorst, ed., *In the Trail of the Wind: American Indian Poems and Ritual Orations*. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1971) の序において、編者はアメリカ・インディアンの観念の特徴を次のように要約している。

1. 言葉には不思議な力があり、それを使用する人は統御の能力が得ら

れる。“Listen!” “Be still!” “Drink my blood!” というような強制的な言葉は典型的な表現形式であり，“around the roots the water foams”とか“my god descended”という叙述的としかみえないような表現でも，その説明をしている行為を引き起こさせる強制的なものである。

2. 夢は霊の世界から夢みる人に力を授けるために送られる伝言と考えられ，歌はその力を具体化したいとする願望なのである。

3. 動物も事象も，人間と同じように人格を持っていると信じられており，鹿や水，風や飢えや病気さえもみな人格を具えている。

4. 自然界のものはすべて，色も言葉でさえも二元的な存在で，詩がスタンザを対にしたり，表現を二重にしたりするのもこのためである。

5. 太陽や空は父の姿をあらわし，空からくだる日光や雨は女の大地の体内に豊饒をうながす生命を与えるものと見なされている。

6. 東西南北の四方は，人間の体の四面すなわち前後左右に照応し，多くの部族の文化の中で神聖と考えられている。したがって4という数も神聖で，4回の繰返しがしばしば見られるのはこのためである。

7. インディアンの詩人は，詩を作るのは自分ではない，自分は単に伝達者であると考えている。超自然的な力から受けとっているにすぎないという考えである。詩神から靈感を受けると考える西欧の詩人と共通しているともいえる。

8. 他部族との相互影響が多い。宗教においては特にいちじるしく，征服した部族の神々を借用したり，キリスト教でさえも例外ではなかった。

以上の特徴以外に，彼らが「内なる歌」(“inside song”)と称するものも注意しなければならないだろう。彼らにとって言葉は単にこの「内なる歌」の速記的なメモにすぎない。その歌はもともと，実際のものであれ神話的なものであれ，長い物語であり，劇的なエピソードであったかも知れないのに，簡素な言葉で表現しようとするために，しかも聞く人たちの多くが共通経験の持ち主であるために，大部分が省略されてしまうのである。しかも導入も説明もないために，短い歌から完全な現解を得ることが困難な場合が多い。ひとつの好例を紹介してみよう。ウンカパ・スー族

(Uncapa Sioux) の呪医であり、戦士でもあり、またカスター将軍との戦争 (the Custer fight) の際インディアン側の一人であった有名な Sitting Bull の作った歌である。少年のころ彼は、灰色熊との遭遇を予告してくれた鳥の夢に救われたことがある。目をさましたとき、すごい勢いで迫ってくる動物の足音を耳にして、あわてて死んだふりをしたために助かったことがあった。のちに彼は友人のために次の歌を作った。

Pretty bird, you saw me and took pity on me;
 You wished me to survive among the people.
 O Bird People, from this day always you shall be my relatives.

(かわいい鳥よ、お前はわたしを見てあわれんだ。
 わたしが同胞の中で生きながらえることをねがった。
 おお、鳥の仲間よ、この日からお前はいつまでもわたしの身内だ。)
 (Helen Addison Howard, *American Indian Poetry*, Twayne Publishers, 1979. pp.24—25.)

さいごに、もう一篇チップワ族 (Chippewa) の短い夢の歌を紹介してみよう。

as my eyes
 search
 the prairie
 I feel the summer
 in the spring

(わたしの目が大草原を探すように、
 わたしは春のなかに夏をさぐっている。)

まるで20世紀のイメージストの詩を読むのと同じような感動を受けるのである。

Bibliography

I.

- Brown, Dee. *Bury My Heart at Wounded Knee: An Indian History of the American West*. New York: Holt, Rinehart & Winston, Inc., 1970
- Hassrick, Royal B. *The Colorful Story of North American Indians*. Octopus Books Limited, 1974.
- James, Edward T., ed. *Notable American Women, 1607—1950*, Vol. 3. Cambridge, Mass: The Belknap Press of Harvard University Press, 1971.
- Josephy, Alvin M., Jr., ed. *The American Heritage Book of Indians*. New York: The American Heritage Publishing Company, 1961.
- Josephy, Alvin M. Jr. *The Patriot Chiefs: A Chronicle of American Indian Resistance*, Penguin Books, 1961.
- Lincoln, Kenneth. *Native American Renaissance*. Berkeley: University Press, 1983.
- Mariott, Alice and Carol K. Rachlin. *American Indian Mythology*. A Mentor Book, New American Library, 1968.
- Meyer, William. *Native Americans: The New Indian Resistance*. New York: International Publishers, 1971.
- Meyers, J. Jay. *Red Chiefs and White Challengers: Confrontations in American Indian History*. New York: Washington Square Press, 1972.
- O'Gorman, Edmundo. *The Invention of America*. Bloomington: Indiana University Press, 1961.
- Still, Bayrd, ed. *The West: Contemporary Records of America's Expansion Across the Continent: 1607—1890*. New York: Capricorn Books, 1961.
- Washburn, Wilcomb E. *The Indian in America*. New York: Harper & Row Publishers, 1975.
- 「アメリカ・インディアン」アメリカ古典文庫。研究社，1977。
- 林屋永吉訳「コロンブス航海誌」。岩波文庫，1977。

II.

- Belvins, Winfred. *Charbonneau: Man of Two Dreams*, Avon Books, 1975.

- Bierhorst, John, ed. *In the Trail of the Wind: American Indian Poems and Ritual Orations*. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1971.
- . *Four Masterworks of American Indian Literature*. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1974.
- Howard, Helen Addison. *American Indian Poetry*. Twayne's U. S. Authors Series 334. Boston: G. K. Hall, 1979.
- La Farge, Oliver. *Laughing Boy*. New American Library (1929), 1971.
- La Flesche, Francis. *The Middle Five: Indian School Boys of the Omaha Tribe*. Madison: The University of Wisconsin Press, 1963.
- Levitas, Gloria, et al. *American Indian Prose and Poetry*. Capricorn Books. New York: G. P. Putnam's Press, 1974.
- McMickle, D'Arcy. *Indian Man: A Life of Oliver La Farge*. Bloomington: Indiana University Press, 1971.
- Turner III, Frederick W., ed. *The Portable North American Indian Reader*. New York: The Viking Press, 1974.
- Waldo, Anna Lee. *Sacajawea*. New York: Avon Books, 1978.
- Watt, Shirley Hill and Stan Steiner, ed. *The Way: An Anthology of American Indian Literature*. Vintage Books, 1972.

American Indians and their Literature

Motoshi Karita

The concept that America was discovered by Columbus and that the American is a single race with its own culture must now be corrected. Because before the 'discovery' of the continent in 1492 there were already many inhabitants, and Cortes the conquerer was embarrassed to find many a variety of Indians, each of whom having quite different types of government and society. So the definition of types of civilization on the part of Marx and Morgan was too idealized to be true to realities. New trends of the study of American Indians might be said to start with Peter Farbs' *Man's Rise to Civilization* (1968).

When Europeans with refined civilization began to conquer uncivilized people in the New World, there were scarcely any trait in common between them, Western intellectuals from the end of the 17th to the middle of the 18th century had antithetical views of the Red Men. On one hand they thought Indians mute and dumb people who had prevented the progress of civilization, but on the other hand they thought them 'nature's noble savages', 'unspoiled child of the land.'

How the conquered Red men met the White men? On Thanksgiving Day, 1970, two hundred Indians from twenty-five tribes gathered at Plymouth Rock to commemorate the landing of pilgrims as a national 'Day of Mourning'. A direct descendant of that Wampanoag tribe who had welcomed the pilgrims aboard the Mayflower in curiosity and friendship declared this act of friendship of his forefathers was 'their greatest mistake'. Since then, they were confronted with multitude of tragic mal-treatments. They had to find some solution to assimilate themselves to the White. Two examples will show their efforts of assimilation. They are Pocahontas and Sacajawea, both of whom were married to Europeans.

As for their literature, the first trait to be noticed is oratory. No writing systems comparable with Old World systems had been developed in the New World. Indians lacking an effective writing system had to establish

oral tradition. In this oral tradition they had enough reasons to respect words. "The Ritual of Condolence" of Iroquois and "the Night Chant" of Navajos are to represent characteristics of Indian poetry and thought.